リレー随筆

気象観測船に乗船して(5)

「啓風丸」でのウンカ類調査――まだまだウンカは飛んでくる――

1992年6月,気象観測船「啓風丸」に乗ることになった。農研センター水田虫害の平井室長を通じて希望は出していたものの、いざ乗る段になるといろいろ不安になり、経験者に聞いて回った。農研センターの持田さん、熱研の伊藤さん、中村さん、蚕昆研の野田さん、兵庫の八瀬さん、皆さん実に丁寧に教えてくださり、資料もたくさんいただいた。啓風丸(1,795 t)が、観測船の中でも一番大きく乗り心地がよいと聞き少し安心した。

担当は太平洋上の四国沖定点で、この定点における調査はしばらく行われていなかった。ここを通過する虫の流れは日本へとたどり着く可能性が少ないためであろうか。

洋上調査と虫たち

出航時から梅雨前線は定点の南にあり,風は北よりの 冷たい風で,ネットに虫は入らなかった。

台風3号の進路が東シナ海へ向かっていたのが東にずれて、定点内を通過するようになったとき、船は台風を避けることになった。船の回避方向が北か南かで気象士の間で話題になり、台風の進路予想は観測船上でも難しいというのがよくわかった。

15 m を超える風が吹くと、57 年作成と書いてあるネットは裂けてしまうのではないかと思うほどの風圧を受けた。このような風のときのネットの上げ下ろしは全体重をかけないとロープの固定ができない。夜半に1人,雨で滑る甲板の手すりにロープを結び付けていて、このまま海に落ちても誰も気がつかないだろうと思った。

台風3号の定点内通過によって前線が押し上げられ、 南西の風とともに様々な昆虫が船に飛来するようになっ た。まず、ホシホウジャクが、次にウスバキトンボの群 れが来た。このトンボが飛んでくるとウンカも飛んでく るとのこと。翌日、風呂に入っていると声がかかり、後 部デッキにウンカが飛んで来ているという。早速、飛び 出すと協力してくれたり声をかけてくれたり、1時間半 ほど吸虫管を使い続けたら、口の中がおかしくなった。

昼、デッキで海をみていると、ひらひらと船のほうにモンシロモドキが飛んできた。こんな頼りなげな飛び方で数百キロも飛んでくるとは驚きである。また船の横をやや大型のヤガの類が海面にチョット着水して、そのまま飛び去った。彼に到達する地があるのだろうか? さらに、金属光沢のアカギカメムシがデッキのロープにとまっていたり、洋上の1点でこれだけの虫が採れるということはどれだけの虫が移動しているのか、羽のあるも

のにとって,海は障害にならないということが実感できた。 ウンカ類は、調査終了3日前から多飛来があり、目的 の一つであったウンカ疫病菌を、セジロウンカ雌1個体 から分離できた。

船内の生活と魚たち

船の生活は乗る前の不安とは逆に、乗員の人たちは親切で、空調もよく効いてきわめて快適なものであった。 食事も記録をつけてみたが、2回鉄火どんぶりが出されただけで同じメニューはなく、ご飯は木のおひつに入れられるなど、食事への気配りには感心した。

サロンではテレビも BS 放送が受信でき、娯楽室には 書架二つに図書があり、時に麻雀卓も囲まれるようで、 壁にチョンボと役満を上がった人の名前が大きく表に なって張り出されていた。

ウンカの話を気象士のゼミでしてくれと言われ、長距離移動、稲の被害等について話をした。洋上の最初の発見者である気象庁の鶴岡さんと一緒に船に乗っていたという人がいて、発見のあと鶴岡さんは吸引式の採集用具をいつも持ち歩いていたとのことであった。

海底からケーブルで固定されている観測ブイに到着,目的はブイの発信するデータの精度の確認である。ブイの照明灯の光に小魚が集まり、それを餌にする魚が集まって、漁場になっている。台風通過直後にもかかわらずカツオ漁船が2隻漁をしていた。早速、非番の人たちがマグロ釣りをはじめ、1時間で20匹ほど上がった。

夜にイカ釣りをしている人たちが多く、トビウオを餌にいろいろな種類のイカが釣れて、これはうまいとかまずいとか言っていた。また、夜の海をのぞいていると船の明かりに魚が寄ってくる。小さなトビウオは胸びれを広げて丸くコインのようにみえ、イカに追われてバッタのようにぴょんぴょん跳ねるような飛び方をした。

そして……

1年後の1993年6月上旬,蚕昆研の長谷川さんと香川県の宮下さんから前後して電話をいただいた。「今度,気象観測船に乗るのですが,船は初めてなので……」,お二人の電話は、内容も、不安そうな声まで前年の私自身とそっくり同じであった。

貴重な資料が得られているこの洋上調査を, ぜひこれ からも長く続けていただきたいと思う。

(茨城県農業総合センター生物工学研究所 松井武彦)